自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究（1）*

藤　原　武　弘**

「巡礼を終わった時、僕は、この道で起こったすべてのことを描いた美しい、大きな絵を描いた。これは普通の人々の道であり、その気になりさえすれば、誰にでも同じことができる。もし絵の描き方を知らなければ、何か物語を書くか、舞踏を創作してもよい。そうすれば人は、どこにいようと、聖ヤコブの道、銀河の道、サンチャゴへの不思議な道を歩くことができるだろう。」（コエーリョ，1987 pp. 244-245）

I　巡礼行動の動機
—巡礼行動へのインプット—

なぜ人々は巡礼を行うのだろうか？巡礼行動に駆り立てる動機があるとすれば、それは一体何なのか？表面的には宗教心によるものと考えられ、従来の調査結果でも、それが第一位を占めている。たとえば、たいていのサンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼者は、「ラ・コンポステラ La Compostela」と呼ばれる、教会が公認している証明書を通常受け取る。その際に、自分の名前、性、年齢、住所、巡礼方法、動機等を記入し、申請を行い証明書を受け取る。教会はその結果を集計した結果を毎年発表している。それによれば、1996年の巡礼者の67%が宗教的動機に基づくと答えている（Compostela, 1997）。

1997年の8月に、筆者はこの証明書を発行する事務所の前で、巡礼者をつかまえ面接調査を行った。その時に証明書欲しさに宗教的動機と答えたが、実はそうではないと本音を吐いた、調査対象者が少なからずいた。また、1998年6月に、筆者が巡礼中に他の巡礼者に動機を尋ねたところ、宗教的な動機ではない、と言っていた巡礼者が「ラ・コンポステラ」を手にしていたのを何人も知っている。イタリア人ヴィッカリオもその一人だった。神を信じていないと公言していたが、ちゃっかりと証明書を手に入れていた。宗教的な動機の割合は、かなり割り引いて考える必要がある。

宗教的な動機もよく考えてみると解ったような、解らないような動機である。キリスト教徒あるいはイスラム教徒の勤め、あるいは定めだから、という理由で巡礼をするのなら、完全に宗教的な規範に従った行動ということになる。イスラム社会のように、戒律がきびしい宗教の場合には、おそらく規範に則った行動なのであろう。だが、いわゆる西欧や日本を中心とした、先進国では宗教的な規律が緩やかになり、宗教的な規制力はそれほど強いとは考えられない。もう少し個人の主体的な理由が何かありそうである。宗教的な動機の背後にあるのは一体何なのだろうか。

これに対するヒントは、パウロ・コエーリョの「星の巡礼」（原本の題名では「悪魔の日記」）の中にあるように思われる。

「宗教的な巡礼は、常に悟りを得るための最も実際的な方法の一つとされているのだ。小さな罪という意味のペカディジョ（peccadillo）という言葉は、道を歩いて行くことのできない傷ついた足という意味を持つペカス（pecus）という言葉から来ている。ペカディジョを正すための唯一の方法は、前へ歩き続け、新しい状況に適応し、その代償として、求める者に対して人生が豊かに与えてくれるという何千何万という祝福のすべてを受け取ることなのだ。（コエーリョ，1987 p. 45）」

*キーワード：巡礼行動、自己過程、聖地
**関西学院大学社会学部教授